細胞図鑑
2023

Title/Illustration：oku

# 細胞図鑑
# 2023

●挨拶にかえて

# 「映画の細胞」覚書

相馬あかり

日本では、年間６００本程度の映画が制作されているそうです。もちろん、そのすべてに目を通すことはできませんし、鑑賞したとしても、本当に記憶に残るのは年に数本あれば良いほうだと思います。

では、なぜ記憶に残る映画とそうでない映画があるのでしょうか。

私の場合、鑑賞時の自分の気分に合ったものや、もともと興味があったテーマを深堀りしているような映画が、その後も大切なものとなる傾向がある気がします。つまり、当時の私が置かれている状況や問題と関わりの薄い映画は、ただ消費されるに留まったということです。裏を返せば、最初から私個人の問題にフォーカスして作られていたならば、その映画は私の記憶に残っていたのかもしれません。

しかしながら、年間６００本ほど制作される映画は、その殆どがマス向けに制作され、公開と同時に全国に一斉送信されます。初めてのデートでドキドキしているカップルにも、コアな映画ファンにも、災害に遭い家を失った人々のもとにも、等しく怪獣映画が届けられたりしています。

もちろん映画は、時間も手間もかかる総合芸術ですから、大作であればあるほど、それに見合った普遍的なテーマが織りこまれていることが多いと思われます。映画の上映システムがリュミエール兄弟の頃から変わっていないのも、そのためでしょう。

しかしパンデミックは、そのシステムの脆弱性を暴き出しました。

同じような感染症が来なくとも、少子化の影響で映画館を満員にすることができなくなる日が来ないとは言い切れません。

その時になってじたばたしても遅いので、今の内から、一人の観客に向けての映画作りと、それを評価するシステムを構築しようと思い立ちました。

映画館がなくなり、人口が減り、地球が氷河期に入ったとしても存続可能な映画と、その作り方。

ちなみに、個々のお客さんに合わせてサービスを提供するビジネスモデルは結構あります。
床屋、歯医者、カクテルバーなどです。
相手の頭の形や歯形、気分を掌握したうえで、各々の技術を提供し、ちゃんと経済が回っています。

しかし、上記のシステムになぞらえるなら、映画一本分のチケット代金で即座に映画を作り、顧客に提供できなければなりません。
テクノロジーの発展に伴い、機材やソフトがかなり安価になってきたとはいえ、本当にそんなことができるのでしょうか？

そこで、「映画の細胞」では、監督／観客の妥協点として、ブリコラージュ（器用仕事）を推奨しています。

ブリコラージュとは、その場で手に入るものを寄せ集めて部品とし、試行錯誤を繰り返しながら新しいものを作る創意工夫を意味します。
「映画の細胞」は、そのような工夫を何よりも尊重・評価し、プッシュしていきたいと考えています。

映画誕生からおよそ１３０年。
不特定多数の観客の時代を経た今ならば、たった一人の観客と向き合ながら映画を作るという贅沢も許されるのではないかという気がしています。

そして逆説的ですが、一人の観客としっかり向き合った映画は、不特定多数の観客にも届くような気がするのです。

Illustration：oku

# 細胞図鑑 2023

目次

「映画の細胞」覚書 4
えろいむえっさいむ「夢をみること／叶えること」 8
もっとも大切な映画の〝細胞〟 16
1分で観るのを辞める男の批評 20
クラッタリング・ミュージック 22
細胞を映し出せ！ 26
漫画「エーガノサイボー？」 28
「映画の細胞」テーマソング 29

# 「映画の細胞」2023 オフィシャル・セレクション

**『走る男』（9:43）**

監督 小林真樹さん / 観客 いなみさん

マラソンが趣味のけんじは、マラソンコースを走っている最中、ふと喉に違和感を覚える。いなみさんのコンテから着想された幻想譚。観客も監督も映画の中を走り抜ける。
その先にあるのは…？

**『廃屋に取り付かれたメスザルの物語』（10:57）**

監督 藏岡登志美さん / 観客 小林心彩さん

撮影を通して、廃墟や野生動物に触れた冒険の記憶。
それが映画に置換されたとき、若い観客は何を目撃するのか？
二度目の冒険がはじまる。

**『懺悔は懺悔である』（5:00）**

監督 山科晃一さん / 観客 三木はるかさん

観客の三木はるかさんが懺悔を繰り広げる室内劇兼会話劇。
撮影時にいた対話相手が上映時にはいないため、観客は映画鑑賞によって自身の懺悔を神父のように聞くことになる。
主客の転換を目指された意欲作。

**『包 bāo』（6:08）**

監督 フッ軽フッサールさん / 観客 松山義文さん

台本の代わりに渡されたのは、一枚のレシピだった――。
初めての餃子づくりを記録することで、観客自身も与り知らぬ姿を炙り出す。
視覚と聴覚に味覚をも包含した怪作が生まれた。

**『結局お前次第』（7:18）**

監督 中村友則さん / 観客 小林潤平さん

純一は、人生の岐路に立たされていた。同僚と別れ、夜の街を千鳥足で歩いていると、交差点の向こうから怪しい男が睨みつけてくる。観客を「お前」と呼べるところまで追い詰めた監督の入魂の一作！

●総評

# えろいむえっさいむ「夢をみること／叶えること」

ハクポ・イシナカ

映画の起源について考える。

リュミエール兄弟の開発したシネマトグラフ。

エジソンのつくったキネトスコープ。

前者は、スクリーンに映像が投影され、それを多くの人が見るというもの。

後者は、個人が箱を覗き込んで、ひとりで想像の枝を拡げるもの。

映画産業は前者の構造を引き継ぐことで、興行として発展していった。

大勢で見る夢として。

それは時にナチスなどの大衆先導にも使われたものの、皆でその夢を共有する愉悦もあった。

『ニューシネマ・パラダイス』に描かれるような、甘美な夢の共有。

「映画を観る」という行為が、単なる作品鑑賞ではなく、「ひとつの体験」になっていたからだろう。

恋人との初めてのデート。キッスシーンにドキドキしながら。

移動映画での映写機の回るワクワク感。

『ミツバチのささやき』で描かれるような（日本だとナトコ映画）。

人生を彩るもろもろが、映画と共にあった。

独りで観る場合も同じ。

自分が映画の主人公になったかのような高揚感。

美しい俳優との溶け合うようなラブロマンス。

不正を暴き、悪を裁く正義の快楽。

反対に、自由にふるまう無頼にこそ、息苦しい世の中からの解放を覚えたかもしれない。

といっても、すべてはスクリーンの中でのこと。

そこに観客の人生があるわけではない。

あくまでそれは人生の添え物、あるいは代替物。
観客が銀幕に入り、その主人公になることはできない。

演劇の歴史を振り返れば、ペーター・ハントケの『観客罵倒』（1966）やリヴィング・シアターの『パラダイス・ナウ』（1968）などを皮切りに、「観客参加」はひとつの形式となった。

観客が「直接、人生を変えるような刺激を劇に求めるようになった」「劇の登場人物に、主人公に、自分がなろうとした」と言えるかもしれない。（とはいえ、当初はドラマを破壊し、観客の人生に直接介入するような仕掛けだった演出も、その後は、「エンターテイメントのひとつの手法」となり、その過激さは失われてしまったけれど。

ただし、「ポストドラマ演劇」と呼ばれるものの一部では、この命脈は生き続けている。）

人生と地続きの「劇場」という場で起こる演劇では、舞台と客席を別ける「第四の壁」は演出ひとつで（ハプニングひとつで）簡単に破壊できる。でも、映画にはそれが不可能。

映画は常に「過去の映像の投影」でしかないから。

スクリーンと客席には、越えられない境界が存在する。

もちろん、映画でも、寺山修司が『ローラ』（1974）で観客（役の俳優）にスクリーンの中と外を行き来させたり、『審判』（1975）という作品で、観客がスクリーンに釘を打ち込むことを要求するなど、その間にある壁を突破しようとした試みはある。

また、ギー・ドゥボールが何も映っていない映像（『サドのための絶叫』（1952））を提示することで、観客の受動性を挑発し、観客の能動的な生に意識を向けさせようとした試みもある（音楽におけるジョン・ケージの『３分４４秒』と似た構造だろう）。

とはいえ、画面の中に一般の観客が入ることはできなかった。映画は現実の代替であり、その主人公に自分がなることはできなかった。

今までは。

「映画の細胞」の「たった一人の観客のために映画をつくる」試みによって、この夢が可能になった。

実際、完成した5本の作品すべてに、観客自身が出演している。これは「長らく叶うことのなかった夢の成就」と言っても過言ではないだろう。

『**走る男**』は、その究極の形と言える。

「漫画家志望だった依頼者（観客）の絵コンテを映画化した」ものであり、その主人公を自身が演じる。

「観客の望みの実現」という意味で、これ以上のものはないだろう。

観客にとって、まさに夢を見ているような、撮影・上映となったのではないか。

ただし、他の作品よりも観客の中に、「こうあってほしい」という「理想のビジョン」がある分、できた作品への不満も、他の

『走る男』監督：小林真樹さん　観客：いなみさん

観客よりも大きい部分もあるかもしれない。
その点はわからない。

興味深いのは、他の４作品において、「現実に叶わない夢を、映画の中で叶えよう」と単純にはしなかったところ。
スクリーンの中で叶えられたところで、それは空しいだけと思ったのだろうか。

４作は、撮影を契機として（あるいはその結果としての作品を見ることで）、
それぞれの人生に直接介入しようとしているように見える。

『**廃屋に取り付かれたメスザルの物語**』では、撮影の源初の喜びが記録されている。
「撮影をきっかけに世界に踏み出す」という。
「書を捨てよ街へ出よう」よろしく、観客が「観客席」を捨てて街に出た瞬間。

今作がドキュメンタリー的であるのは偶然ではないだろう。
ドキュメンタリーには、元来、「現実をカメラによって切り開く」という側面がある。
まだ見ぬ「他者」「世界」に出会う喜び。
それがドキュメンタリー映画の本質と言えるだろう。
この作品には、その喜びがストレートに記録されている。

世界を切り開くカメラという刃。

それを「社会派」は権力構造などに向ける。
「私ドキュメンタリー」はその刃を自身に向ける。

『**懺悔は懺悔である**』は、まさしく「私ドキュメンタリー作家」である三木はるか監督が観客（出演者）となった作品。

三木はるか監督は、「私ドキュメンタリー」と言っても、「カメラで自分の内面をえぐり出す」というよりは、「自画像を戯画として提示する」という特徴がある。

「ありのままの自分」というよりは「演じられたもの」という感覚。

その引き裂かれた揺れを「第三者の視点によって増幅したい」というのが、今作の意図なのだろうか。

いや、そもそも【「誰もわたしを見てくれないから、自分で自分を撮るしかない」と映画を作っていた者】が、【「やっと第三者から撮ってもらえる」と思っただけ】かもしれない。その場合、『走る男』同様、「観客の願望の成就」の最高の形と言えるだろう。

いやいや、でも、そうであるなら、もっと「カッコイイ姿」を撮ってもらおうと思うはずだから、やはり、三木監督の狙いは、「素（ドキュメンタリー）」と「演技（フィクション）」のあわいということか。

でも、それを、「自身の作品として発表するため」ではなく、「自分が観るため」につくってもらうとは何か？

『廃屋に取り付かれたメスザルの物語』監督：藏岡登志美さん　観客：小林心彩さん

そこまでして、「監督として自分が映画として向き合っていること」を突き詰めたいのか？
あるいは、人間として、自分の在り方（そこにある虚栄心など）をそこまでして見つめたいのだろうか？

それほど真摯なのか。
マゾヒストなのか。
作家として、人間として。
すべて深読みで、ただのナルシストでしかないのか。

いずれにせよ、この作品を観た三木は、何を感じたのだろう。
その姿に酔いしれたのか、絶望したのか。

一般的に映画とは、「観客ありき」≒「エンタメ」と、「監督ありき」≒「問い」と大別することができる。（もちろん、両方の間で揺れている作品もたくさんあるし、「無目的こそ美」という芸術派も存在する。）

**『走る男』『廃屋に取り付かれたメスザルの物語』**は、やりとりなどはあっただろうけれど、どちらかと言えば、「観客の要望に応える形で映画が作られている」と言えるだろう。

**『懺悔は懺悔である』**も、監督三木はるかなのか、人間三木はるかなのかは別として、観客の要望でできた作品と言える。

『懺悔は懺悔である』監督：山科晃一さん　観客：三木はるかさん

『包 bāo』監督：フッ軽フッサールさん　観客：松山義文さん

対して、『**包 bāo**』『**結局お前次第**』では、監督から観客への「問い」が起ちあがってくる。

とはいえ、その方向性は１８０度違う。

『**包 bāo**』は、テーマとしては『懺悔は懺悔である』と近く、「記録／演技」の微妙な差異を捕まえようとしている。

監督から観客（出演者）へのお題「餃子づくり」は、それによって何が記録されるか、観客（出演者でもある）にどんな変化が起こるのか、わからない状態で出されている。

「問い」はあるけれど、想定される応え（答え）はない。目的がない。

問いがあるだけで、メッセージはない。

だから、観客（出演者）自身にも何が起こっているのかわからない。

でも、そこには確実に何かが捉えられ、完成した作品には何かが映し出されている。

鏡・自画像を見続けて何も思わない人がいないように、観客には「何か」がはっきりと経験され、記憶され、それが記録・作品となって見返される。

でも、その「何か」は「観客」にしかわからない。

それは『懺悔は懺悔である』と同質のものなのだろうか、それとも全く違うのだろうか。

対して、『**結局お前次第**』には「監督が観客（出演者）に介入

しようとする」意志がはっきり見てとれる。タイトルにも反映されている。

どんなメッセージ映画でも、観客が不特定多数の場合には、観客はそのメッセージをスルーすることができる。「ウザい」と言って。

でも、「映画の細胞」では1対1の構造のため逃げられない。今作では出演までしているので、尚更。

一歩間違えば、これは一触即発の暴力にもなりかねない。

でも、だからこそ、他の4作、いや、世の中にあるすべての映画にはない絶対的な緊張感がここにはある。

これは毒なのか、薬なのか。

コンプライアンスが厳しく叫ばれる現在、

この作品をどう捉えたらいいのか、正直、迷ってしまう。

「だからこそ価値がある」のか、「だからヤバい」のか。

『**結局お前次第**』のように、監督と観客が1対1でガチンコで向き合う映画づくりによって、何が顕在化しているのか。

第三者が観て「おもしろい」か「つまらない」かなんて、何の関係もない。

たったひとりの観客自身が、満足するかどうか。

いや、「満足はしないけれど、人生に影響を受けた」ということだってあるだろう。

そう考えると。「暴力」とは。「介入」とは。

『結局お前次第』監督：中村友則さん　観客：小林潤平さん

観客に「顔」が生まれる。そこで監督の「顔」と出会う。向き合う。コミュニケーションの源初的な姿。

人が出会い、相互に介入する行為は、すべて暴力と紙一重。いや、暴力そのもの。

だから、恋人や夫婦、家族、親友間でさえ、争いが絶えない。

サルトルの言葉を借りるまでもなく、「他人とは地獄」なのだから。

コンプラやポリコレを突き詰めていけば、世の中から表面的な暴力は少なくなっていくだろう。

でも、当然、人と人との真の出会いはなくなっていく。

他者とは誰も向き合わなくなる。

「誰にも出会わないこともまた地獄（孤独）」であるならば、これは幸福なことなのだろうか。

『**結局お前次第**』は、図らずも、コンプラ重視によって損なわれようとしている映画づくりの根幹にあるもの、引いては、社会を覆いはじめた「優しさという名の無関心（排他性）」「ホワイトな単一化」の問題を顕在化させてしまったように思う。

だからと言って、「暴力礼賛」という気はさらさらなく。

どうしたらいいのか、わたしにもわからない。

けれど、とても、とても大切なこと。

各々の作品を、ある一面から語り繋げてきたけれど、それぞれの問題は相互に関係している。

というのは、1対1で映画をつくるとなった場合、映画が抱える可能性も矛盾も、そして人間が、人間関係が抱える可能性も矛盾も、すべてがダイレクトにそこに反映されてしまうから。

作品の本当の「成果」は、それぞれの「観客」の中にしかないだろう。

第三者はブラックホールを眺めるように、その内実を想像することしかできない。

「映画の細胞」はパンドラの箱を開けてしまったのか。

だとしたら、その中に入っていたものは何だろう。

えろいむえっさいむ

えろいむえっさいむ

われは求め訴えたり

●協力者より

# もっとも大切な映画の〝細胞〟

木澤航樹

僕が初めて映画を作ったのは、２０１５年の秋だった。

当時の僕は大学４年生で、人よりも遅く就職活動を終えた。ようやく内定を貰ったとき、ため息が漏れた。あまりの疲れに、安堵する余裕もなかった。

憔悴した状態で地元の映画館に足を運んだとき、映画製作のカルチャースクールのチラシを手に取った。

面白いことで息抜きがしたくて、迷わずに受講を開始した。映画に強い興味があったわけではない。シンプルに、何かがしたかった。

本当に、何でもよかった。

授業は金曜日の昼にあった。

女優、元自衛隊員、体中に紋様のタトゥーを入れた研究者――。

１０人に満たない小さなクラスだったけれど、大学生活や就職活動では出会うことのない人と同じ教室で過ごせることが嬉しかった。

脚本を書いたり、映画を作ったりすることも、すごく楽しかった。映画が好きかはよく分からないけど、映画作りは大好きになった。

こんなことをするのは大学卒業までのつもりだったけれど、脚本の先生からは「就職しても作り続けてください」と言われた。

授業のあと、渋谷で深夜まで飲み続けたのち、別れ際にかけられた言葉だった。

その指示を忠実に守り、会社員になっても、同じスクールに通い続けた。

結局、スクールには２０１９年の初夏までお世話になった。

映画作りは次第に苦しくなっていった。深夜まで続く撮影の授業は身体にも心にも堪えた。自作の映画が映画祭で上映されても、お客さんと繋がれている気がせず、満たされなかった。

自主映画作家の多くが、独り相撲をしているように見えてきた。映画を撮り始めてから４年弱。映画作りの総てが、ネガティブに思えた。

就職活動が終わったときほどではないにしても、僕は疲れ切っていた。

「しばらく、映画作りはいいかな」と思ったし、それができる

心の状態ではなかった。
でも、この時の僕はもう、何かを作り続けずにはいられない身体になっていた。
脚本の先生からもらった「作り続けてください」という言葉は、ハートの奥まで刻まれていた。
気づいたときには「東京フェイクドキュメンタリー映画祭」の開催に向けて準備をしていた。
ネットで上映作品を公募し、会場を探した。
知人から「なんでフェイクドキュメンタリーを扱うの？」と訊かれたけれど、「誰もやってなさそうだから」としか答えられなかった。
僕にとって大切なのは、「フェイクドキュメンタリー」を扱うことではなかった。独り相撲ではない形で、何かを作れれば、それでよかった。
４ヵ月の準備を経て、２０２２年の２月に、映画祭を終えた。
映画祭で作品を上映いただいた作家の１人が、のちに「映画の細胞」の主催となる、相馬あかりさんだった。
多くのお客さんが帰路につき、人がまばらになった会場で、相馬さんにお礼を述べた。すると相馬さんは
「映画祭っていうのは、映画が好きなんじゃなくて、お祭騒ぎが好きなおじさんがやるもんだと思ってました。でも、木澤さんは違う。いやぁ～。これはハックですよ」と、笑って話してくれた。
それから、相馬さんとよく会うようになった。
相馬さんは常にカメラを持ち、あらゆるものを笑いながら撮影していた。僕が失ってしまった映画作りへの愉楽を、相馬さんは常にモヤモヤと漂わせていた。
そんな相馬さんだけれど、既存の映画産業についての会話になると、語気を強めた。
「後輩が、映画業界って腐りきってますよねっていうんですよ。腐ってるじゃなくて腐りきってるって（笑）。酷いこというなぁと思いながらも自分もその端っこにいるから、何とか否定しようと思うんだけど、どうしてもうまくいかないんですよね。具体的に何が腐りきってるのかわからないところもあって。腐ってるのは映画業界なのか？　映画産業なのか？　それとも映画のフォーマットなのか？　全部だっていう人もいますけど（笑）。全部腐ってるなら、もう違う穴の貉になるしかないんですけど、違う穴ってどうやって掘るんですかねぇ？」
多かれ少なかれ、僕も業界と重なる部分があり、いたたまれなくなるとともに、相馬さんの愉楽の秘密を知ることができた気がした。また、既存の映画産業に迎合しようという煩悩が、自分から映画作りの楽しさを吸い取っていたことに気づいた。
もちろん、相馬さんとて無欲ではないけれど（ときおり、野心を覗かせる発言をしている）、意図的に「匿名者」であり続ける姿勢を保っているように見えた。そしてその心持ちが、映画作りへの愉楽に繋がっているのは、火を見るより明らかだった。
辞書で「細胞」を引くと、「細胞……生命体を構成する基本単位」と説明されていた。
つまり、「映画の細胞」とは「映画を構成する基本単位」とい

うことになる。

1人の監督と、1人の観客――。
いずれも正真正銘の映画を構成する基本単位。
そして、その2つの基本単位から生まれる映画もまた、映画の細胞なのではないか――。
主催の相馬あかりさんは、そう考えて「映画の細胞」というプロジェクトを考案したと思われる。

だけれど、もう一つ、外すことができない細胞があると、僕は思っている。

「愉楽」。

それこそが、「観客」と「監督」に並ぶ、映画の細胞の重要要素なんじゃないか。
観客と監督がいても、楽しさなくして作られた映画に、果たして映画を名乗る資格があるのか。
相馬さんとの関わりを通し、僕はそう思うようになった。

Illustration：oku

映像を作りたい方
映像を作ってほしい方
同時募集。
のために映像を作る——。
同時募集。

●第三者の眼

# 1分で観るのを辞める男の批評

原人

相馬監督から度々送られてくる難解な短編映画を、流し見し、率直な感想を反射的に返していたら、いつの間にか「1分で観るのを辞める男」という大変失礼な呼ばれ方になっていました。

ですが、実際その通りです。

そんな面倒臭がりな男が、今回誕生した「映画の細胞」5作品の批評をさせていただきます。

『**走る男**』はノスタルジックな雰囲気と、物語後半部分からの明るい雰囲気の2つが楽しめる作品です。

マラソン中に苦しくなった時、遠い日の祖父の言葉を思い出し、必死に生きる主人公の眼の前に眩しく映る女性や子供の撮り方が印象的でした。

「走ること＝生きること」と捉えて観るとしっくりきたかな、と思います。

エンディングクレジットの合間に流れるシーンを観ると、撮影風景も和気藹々としていて、監督と観客が一体となって一つの作品を作り上げている、今回の「映画の細胞」のテーマに相応しい作品だと感じました。

『**廃屋に取り付かれたメスザルの物語**』。

廃屋にたった1匹で住み続けるメスザルの生態に迫るドキュメンタリー作品。

最初は1匹のニホンザルの話からはじまり、1匹になってしまった経緯と、昨今の害獣被害の現実、最後は日本における動物観をストレートに観客に問う、硬派な映画となっています。

監督と共に廃屋に入り、至近距離で感じた野生動物の空気感は、幼い観客にとって貴重な経験になったかと思います。

『**懺悔は懺悔である**』。

観客自ら主演として独白し、それを自分自身で鑑賞するというところまでが一連の、変わった手法の会話劇です。

内容はさておき、映画祭の趣旨である、一人の監督が一人の観客へ贈る「映画の細胞」を体現していると思います。
自分（観客）へ向けた懺悔を他者が客観的に観る、そんな瞬間を第三者に与える、稀有な作品でした。

**『包 bāo』**。
主演（観客）は何故、餃子を作ることになったのでしょうか。
買い物風景を多角的に捉えつつ、見覚えのあるキッチンに立つ男は何を思いながら料理をはじめたのでしょうか。
終始説明がないまま物語は展開し、最後は自ら料理した餃子を試食しました。主演の男性は、「自分の知らない一面を見てみたい」と語ったそうですが、果たしてその願いは叶ったのでしょうか。
そんな疑問と余ったラー油だけが残る作品です。

**『結局お前次第』**は様々な柵を持つ現代人を描いた映像劇で、社会集団に属していると誰しもが感じる生きづらさをテーマに描いています。
鬱屈とした雰囲気のなか、夜の渋谷を舞台に主人公と一人の男が交差点、路地裏と場面を変えながら諍うシーンは中々の見どころでした。
監督が今回の観客に送った最後の言葉は、この作品のタイトルだったのかなと、推察できます。しかし、一人の観客以外にも、万人に刺さる言葉なのではないしょうか。

●言葉の細胞

# クラッタリング・ミュージック

虹森閉開

蛸足配線から火花が飛び出し、コンセントの窪みにたまった埃の塊に引火して、アパートの土壁が黒い煙を放ちながら燃えていた時、僕は35年以上務めている新宿の会社で、ネットワークシステムの脆弱性を見つけ出そうとする振りをして、いつものようにネットサーフィンをしていた。

火災保険は、2年前に契約が切れた際に更新手続きをしていなかったため、築44年の賃貸住宅の原状回復費用約90%を自己負担することになり、僕は殆どの貯金を使い果たした。

その後、僕は昼でも暗いような市営住宅に移り住み、自治体からの借り入れを減らすためにユーチューバーを目指して日夜奮闘していたが、いつまで経っても再生数は二桁を超えず、パソコンの前に座ると、背中にじっとりと嫌な汗をかくようになり、終には動悸が収まらなくなってきた。

市営住宅の裏手に並んだソメイヨシノが一斉に芽吹いて、赤黒く濁って散るまでの間に、僕はようやく、かつて自分が想定していた、プチブル的余裕でもって面倒事を回避する〝終身モラトリアム生活〟へは二度と帰還することができないのだと悟り、真夜中過ぎに上下の歯をランダムに打ち鳴らしながら、独り長大な慟哭を繰り広げていた。野鳥の囀りのようにも聴こえるその音の意味を強引に翻訳すると、おそらくは次の如くなるだろう。

おぉ、人生を一からやり直さねばならないと了解した時、必要になってくる諸要素よ、何処(いずこ)へ？

若さ、才能、無根拠な自信。なべて、時の海底(うなそこ)へ消え失せて久しい。

人口金字塔(ネットワークシステム)の急所を見つけんと、渺茫(びょうぼう)たる海をひねもす揺蕩うていた我に、如何なる救いがあろうぞ？

---

「それは、大変でしたね。前職は何を？」

「セキュリティエンジニアです」

「んー。まったく業種が違うんですけど、大丈夫ですか？」

ハローワークでは、日々そのような常套的対話が繰り広げられていた。そうして僕は、毎度返答に窮しては、上下の歯を不規則に鳴らし続けるのみなのであった。

《予期せぬことが起こるためには、常に今日と同じ明日が続くものと妄信していなければならない。夜の帳は太陽を覆い隠す。明日の君を照らし出すために。》

『夜の帳に』北川均

春風が土の匂いを運んできて、下半身に肯定的な力を漲らせるように感じられはじめたある日、僕は不意に、元妻と生活を共にしている一人娘の令子に電話をかけてみようと思った。

「お父さん？　何？　今しんどいんだけど」

「そうか。仕事は順調か？」

「それなりだけど。ねぇ、どしたの突然？」

「いや、お父さんな。実は、家焼いちゃってささささささささささ……」

「え？」

「かかかかかかかか火事だよ。アパート焼けちゃって、今、職安通いながらユーチューバー目指してるんだだだだだだだだ……」

「何それ。気持ち悪い」

僕は咄嗟に電話を切っていた。

歯の上下運動が始まると、直ぐには収まらない。緊急地震速報のアラートの如く問答無用で反復される語尾を、哀しい気分でやり過ごす他ないのだ。

この日以来、僕には春の風も、何処かしら気怠い空気のように感じられて仕方なかった。

---

新社会人が街を跋扈し始めると、僕は劣等意識のようなものを抱き始め、硫黄の匂いが立ち込める市営住宅に引きこもるようになった。

部屋の中では、殆ど何もしていなかったが、受動的に観れたのでテレビだけは点けたままにしていた。小麦粉にキャベツのみを混ぜて作った水っぽいお好み焼きを、やみらみっちゃに頬張りながら、只管画面を凝視している。

新型コロナウイルスの感染状況と、ロシアのウクライナ侵攻を巡る時事ニュースの合間に、ウィル・スミスが、アカデミー賞の授賞式でコメディアンのクリス・ロック氏を壇上で平手打ちして10年間出席禁止になったというトピックが流れる。映画監督や有名俳優による性加害報道と謝罪報道を、お笑い芸人が真剣な面持ちで議論している。

明日の食費をどう工面するかで頭を悩ませていた僕にとって、それらの話題は何一つ切実に響いてこない。

暫し放心した後、僕はスマホを取り出し、X（Twitter）のタイムラインを眺め遣ることにした。

『「いいね」をもとにおすすめ』とやらで、フォローもしていないアカウントからのツイートが表示されるが、まったく興味がない。不躾なプロモツイートもいちいち癪に障った。フォロワーのリツイート内容が気になったので、一応トレンドも見てみる。

『ピエール瀧 寄り道も悪くない』

『松田聖子が活動再開 涙抑えられず』

『NHKお天気お姉さん「号泣放送事故」の真相』

『【山里亮太】蒼井優の〝推し活教育〟がすごいと話題！元宝塚スター・愛月ひかると奇跡の対談！』

……

スクロールしながら、僕は戦慄した。

端末は、誰かのプロモーションで埋め尽くされていた。

歯が顫動し、キャベツのみを具とした水っぽいお好み焼きを戻しそうになる。

僕は携帯を切った。

これ以上、不要な情報に苛まれたくはなかった。

---

調子のいい時には、火事で家と財産を失った元セキュリティエンジニア（50代男性・バツイチ・吃音症あり）が転職に成功するための秘訣をインターネットで虱潰しに探したりした。似たような記事は幾つかあったが、ピンポイントで自分と同じ境遇にある者は一人としていなかった。映画や漫画の中に自分より不幸な人間を探そうと躍起になった時期もあったが、どれも絵空事のような質感で、頗る気が滅入った。

夜には、ソメイヨシノの残花に向かって歯を打ち鳴らした。全ての可能性が失われてゆく中で、どういうわけか、この特殊技能のみが命脈を保ち、且つ洗練され、無信仰の僕にとっての祈りに近い何かへと変容してきているようにすら感じられたからだ。

その日も、僕は、長く伸びる星辰の光に僕なりの祈りを捧げていたように思う。

ぜんたい自分は、明日もここにいられるのだろうか？

明日、ここから離脱しようと、ふと決意したりしないだろうか？

自分が死んでも誰も困らない。

妻は着信拒否。娘も最後の電話で「気持ち悪い」と言った。

元同僚らは、励ましの体でやってくるが、不幸になった自分の境遇を嘲笑うだけだ。

火事で家と財産を失った元セキュリティエンジニア（５０代男性・バツイチ・吃音症あり）を励ます者など世界中何処を捜してもいない。

誰も困らない。もう、誰も困らないんだ。

「あの、すみません……」

無心で祈りを捧げていた僕は、突然の声に驚き、水浴びをする鴨のように手足をバタつかせて無様に振り返った。

見れば、ソメイヨシノの陰に、一人の少年が立ち尽くしている。黒髪で、肌の色が白いうえに、黒シャツ白パンツを合わせているため、頭部と胸部が闇に埋もれて見える。

「ななななな何ですか？」

「これ、聴いていただけませんか？」

言うと頭部と胸部の欠けた少年は、一枚の自作CDを手渡して寄こした。

「作ってみたんです。曲」

「君がが、がが？」

「あ、はい」

「どどどどどどどどうして？」

「自分、音楽好きで。でも、今まで全然いい曲できなくて。でも、ここに引っ越してきて、夜におじさんの声聴いて、何ていうか、ちょっとインスピレーションが沸いたっていうか……。あの、ほんと、暇な時でいいんで」

---

音源は、『クラッタリング・ミュージック』と命名されていた。

クラッタリング（clattering）とは、コウノトリ等が求愛や威嚇の際に嘴を激しく打ち鳴らすことをいうらしい。

ソメイヨシノの裏から放たれる僕の吃音リズムを、市営住宅の向かいにある黄色い屋根のアパートから聴いていた少年は、昼にこっそりバイノーラルマイクを仕込んで、音の主を特定しようとした。どうしてこんな住宅街にコウノトリがいるのだろうかと疑問に思っていたら、５０絡みのおっさんが自身の歯を上下に打ち鳴らしていたと知り、かなり驚いたとのこと。

また彼曰く、スティーヴ・ライヒという現代音楽家の作品に、『クラッピング・ミュージック』という手拍子だけで構成されている楽曲があるそうで、僕の吃音とコウノトリのクラッタリングを組み合わせながら、ライヒの手法との異種交配を目指したのだそうだ。

音楽的素養のない僕にとって、それらの説明は理解し難いものだったが、彼の音源が齎すシンプルな美しさは感受することができた。

楽曲は、以下の構成を辿る。

僕の吃音リズムは、ある段階までは法則性を持ってきっちり反復されているのだが、中途で嚙み合わせがおかしくなり、段々と不快感を誘うようになる。一旦失われたリズムは恢復せず、音楽の形式を失効

させるほどのカオスへと導かれる。そこへコウノトリのクラッタリングがやってきて、僕の吃音にささやかな求愛を示す。いつしか威嚇の様相を呈してくるクラッタリングを止揚するようにして、僕の吃音は本来のリズムを取り戻してゆく……

硫黄の匂いが立ち込める市営住宅の一室で、僕はコウノトリの合作をリピートしながら、独り滑り気のない涙を迸らせていた。

かの音源から伝わってきたのは、明らかに、間違いなく、今ここにいる自分に対して作られたものだという揺るぎない事実だった。

---

あくる日、僕は頭部と胸部の欠けた少年にお礼を言いに、黄色い屋根のアパートメントに向かった。

名前を聞いていなかったので、手当たり次第にチャイムを鳴らして聞き取り調査をしていたら、管理会社を名乗る痩せた男が現れ、「いい加減にしないと警察を呼ぶぞ」としゃがれた声で脅されたりした。僕は事情を説明しようと躍起になったが、件の吃音が障壁となり、思うように話せないでいる。挙句の果ては、「入居者様に関しては、個人情報なので教えられません！」と一方的に突っぱねられる始末。

暫し途方に暮れていると、上の階から若い女の声が届いた。

「佑二君のことですかねぇ？　その、音楽やってるって子」

「こんにちわわわわわわ」

「現代音楽ですよね？」

「あー、そそそそそそうです。多分、そそそそその人です」

「彼がどうかしましたかぁ？」

「ちょっと、止めてくれませんかね。そういうの。勝手に！」

「ぼぼぼぼぼぼ僕、ＣＤを貰ったんです。どどどどどどうしても、あああああありがとうって伝えたくて……」

「ちょ、余計なこと言わないでってば！」

エンジニア時代の自分のように、予期せぬ事態を只管穏便にやり過ごそうとしている管理会社の男の、強圧的でありながら何処かしら羞恥に塗れたしゃがれ声を打ち消すかの如く、僕は叫び続ける。

「おおおおおお教えてください。かかかかかか彼は何処にいるんですかかかかかか……？」

吃音が反響し、アパートいっぱいに遍在する分身が合唱しているように聴こえた。

「今朝早く、バリ島に発ちましたよ。ケチャを勉強するんですって」

---

それから僕は、またハローワークに通うようになった。

相変わらずの常套的対話。振るわない成果。

エスカレーターを降りながら、僕はふと、令子に電話をかけようと思った。話すことなど何もないというのに。

「お父さん？　元気？　この前はゴメンね。何かイライラしてて」

「いいいいいいいんだ。大丈夫だから」

「ほんとに？　無職なんでしょ？」

「だだだだだ大丈夫。ななななな何とかするよ」

「私も頑張るね。もうすぐお母さんになるんだ」

「え？」

「赤ちゃんが生まれるのよ。８ヶ月だって」

僕は「コウノトリが運んで来たんだね」と言おうか迷ったが、「おめでとう」と言うだけに留めた。

夕飯は、おそらくは池袋の炊き出しになるだろう。

●上映当日の顛末

# 細胞を映し出せ！

大迫覚

2022年のメタバース元年に続き、2023年はApple社よりビジョン・プロが発表。しかし、セカンドライフ、PSホーム、3Dテレビといった世の中に浸透することのなかったものをみてきた人にはまだまだ懐疑的な見方をしている人も多いのではないかと思う。

2023年というと、covid-19の流行も収束して元通りの日常に戻りつつあり、リモート勤務や巣籠もり消費からリアルへと回帰していく。もし、covid-19が未だに猛威を振るい、巣ごもり消費が盛り上がり続けていたら、これからメタバースが一気に普及していく「ifの世界」があったのかもしれない。

さて、そんな社会情勢のなか、「映画の細胞」という1人の監督から1人の観客に作品を贈るという新しい試みが行われた。監督が観客に一対一でプレゼンする形式も検討されたが、せっかくならば関係者全員でその経験を共有しようということでプライベートシアターを貸し切っての上映会形式となった。

「if の世界」にならなかった現在では、「没入感 × 体験の共有」を追い求めるとプライベートシアターが今後も有力的な選択肢である。今回の会場となったそのシアターはタイ料理店の地下に設けられていて、オーナーが趣味で追い求めた産物なのか、初めから商業的な貸し出しを想定していたのか分からないが、いわゆるオーディオ・ビジュアル愛がオーナーから感じられた。

しかし、肝心な上映会当日、現地につくと何やら不穏な雰囲気。ぞくぞくと参加者が集まるなか、プロジェクタが使えない事実が伝わる。プロジェクタを調達するために奔走する者もいれば、正常性バイアスの作用で危機感の無い者もいたのかもしれない。プロジェクタの電源コードが抜けていたため、案外そんなことが原因なこともあるかとオーナーに確認するも、それは淡い期待に終わる。参加者の中の子供らは状況がどうであれはしゃいでいて、スクリーン前ではしゃいでいたときにはオーナーから「プロジェクタ以上にスクリーンは高価だから気をつけて」と窘められる場面もあった。はじめのプロジェクタ調達が空振りに終わり、いよいよ時間的にも開催が危ぶまれた時、遅れて向かっている監督がプロジェクタを持参しているとの話がまことしやかに伝わり始める。あたかも正常性バイアスから現実逃避に発展したデマなのかと思うほどに都合の良い話だったが、それは紛れもない真実であった。

そして無事にイベントが終わったあと、オーナーとの交渉の末、今回は無料にしてくれることとなった。また、既に新しいプロジェクタの発注済みで、「発注したプロジェクタはレーザー方式で今のプロジェクタよりも高性能のものとなるから是非次こそは」とのこと。こんなところでもオーナーのオーディオ・ビジュアル愛を感じつつ、次回が無理でもその次の開催時、さらには打ち上げもタイ料理店で出来ればなお良しと思うのであった。

●漫画で細胞

# 漫画「エーガノサイボー?」

oku

監督・観客 同時募集中！経験不問

●歌える細胞

# 「映画の細胞」テーマソング

作詞・作曲：相馬あかり
編曲：とおやまさやか
歌：cloud monitor

きのう来た 映画の細胞
ほんと ミラクルだよね
あのこと このこと
思いながら 持ち歩く

頭の中にも
（Movie Cell）
心の中にも
（Movie Cell）
棲みつかせたなら

いつか育つよ
（Movie Cell）
きっと膨らむよ
（Movie Cell）
君だけの夢が

愛と映画の細胞
君と映画の細胞
いつも 掌サイズで上映待っている

魔法の瓶なのさ
秘めたる音なのさ
みんなとおんなじもの観て泣かないで
一人ひとつだけさ

愛と映画の細胞
君と映画の細胞
いつも 掌サイズで上映待っている

きのう来た 映画の細胞なんて
最高の相棒だね
新種の お守り
売ってないのさ 何処にも

頭の中にも
（Movie Cell）
心の中にも
（Movie Cell）
芽生えてくるのさ

君だけの唄
（Movie Cell）
ぼくのプレゼント
（Movie Cell）
夢をたくすのさ

愛と映画の細胞
君と映画の細胞
いつも 掌サイズで上映待っている

魔法は海を越え
異国へも届くだろう
ぼくにはなんにもないよと泣かないで
一人ひとつだけさ

愛と映画の細胞
君と映画の細胞
いつも 掌サイズで上映待っている

愛と映画の細胞
君と映画の細胞
いつか 膨らみ満たすさ 十六夜月（いざよいつき）のように

愛と映画の細胞
君と映画の細胞
ララララ……

# 細胞図鑑 2023

©EIGA NO SAIBO

二〇二四年三月一五日発行

■総監修 ―――――――――――――――――――――――――――― 相馬あかり

■執筆者

「映画の細胞」覚書 ―――――――――――――――――――――― 相馬あかり

えろいむえっさいむ「夢をみること／叶えること」――――――― ハクポ・イシナカ

もっとも大切な映画の〝細胞〟――――――――――――――――― 木澤航樹

1分で観るのを辞める男の批評 ―――――――――――――――― 原人

クラッタリング・ミュージック ―――――――――――――――― 虹森閉開

細胞を映し出せ！ ―――――――――――――――――――――― 大迫覚

漫画「エーガノサイボー？」――――――――――――――――― oku

「映画の細胞」テーマソング ―――――――――――――――――― 相馬あかり

■カバーデザイン・イラスト ―――――――――――――――――― oku

■写真

『走る男』――――――――――――――― 監督 小林真樹さん／観客 いなみさん

『廃屋に取り付かれたメスザルの物語』 監督 藏岡登志美さん／観客 小林心彩さん

『懺悔は懺悔である』――――――――― 監督 山科晃一さん／観客 三木はるかさん

『包 bāo』――――――――――――― 監督 フッ軽フッサールさん／観客 松山義文さん

『結局お前次第』――――――――――― 監督 中村友則さん／観客 小林潤平さん

■発行所 ―――――――――――――――――――――――――――― 明滅工場